

随想

佐伯航空隊点描

思い出すままに

絵垣七郎

(会員 佐伯市池田下久部)

(一)

佐伯航空隊が開設されて間もない頃の或る日、特務将校らしい二人に率いられた十名ばかりの下士官兵がわが家に訪れた。町内の銀行に移っていた父が、司令との間に植木の寄贈を約束したらしく、新設された航空隊庁舎の前に植える樫の木を掘りに来たのである。わが家の裏山にはかなり大きな数本の樫の木があった。

それを兵士達が元気に任せて掘り取り、全員が木に取り付いて、栗の木の植わった急傾斜の段々を下士官の「ワン、ツ一の、スリー」というかけ声に合わせて、足を滑らしながら平地まで下し、それをヨイショ、ヨイショと部落入口の神社の下まで運んだ。神社下の広場には二台

の大型トラックが待っていた。鼻たれ小僧だった私達は、その重い樫の木を、荷台の高いトラックにどうして積むのかと興味をもって見物していた。

広場の上には「ドウマの松」と呼ばれる樹齢二、三百年とも思われる大木の松の木が地面と平行に近く斜めに差し出していた。指揮官の将校は、その松の木の大きな一の枝が真上に伸びて二股になった幹の付け根あたりに太いロープを通させ、その一方を運んできた樫の木の根元に結び付け、反対の一方を一台のトラック車台後部の鉤に結び付けさせた。そのトラックの荷台に兵士総員を乗せて重量をつけた上で、将校の号令一下ロープを引いたトラックはエンジン音も高く後輪を空転させながら発進した。滑車槽代りに使われた松の大木は大きく身をふるわせ、ロープ部分の樹皮を剥がせて樫の根元を吊り上げた。そこに別のトラックが後進で根元の下に荷台をすけ込むように入つてうまく樫の木を積むことができた。今度はその樫の木を積んだトラックがロープを索引してもう一台のトラックに別の樫の木を積んだ。私達は、その合理的かつ迅速で見事に統制のとれた海軍さん達の行動に或る憧れと深い尊敬を感じながら最後まで見学した。

家では海軍さん達をもてなすために母が諸をふかし、縁側で将校さんにすすめた。ボタンのないホック式の軍服を着た将校はテレテ遠慮しながら縁先で湯気の立つ諸を食べた。兵士達は桎の木をかつき下す時に拾ったと云って、もう時季を過ぎて固くなった栗を珍らしそうに大事に持っていた。私達子供部隊も時間を構わずに付きっ切りで見物していた事から、昭和九年頃の十一月か十二月の日曜日ではなかったろうか。こうして運ばれた桎の木は早速航空隊庁舎の前に植えられていた。海軍記念日などに航空隊を訪れた際にこの桎の木を見た私は自分の家族に会ったような懐かしさを覚えたものである。軍隊とはいえまだまだノンビリした時代だったようである。その桎の木も今は海上自衛隊の庁舎の前には見当らない。思うに、航空隊が空襲を受けるようになって対空監視の邪魔になるために切り倒されたのではなからうか。神社の下の「ドウマの松」も戦後マツクイムシのために枯れて切られ、いま僅かにその株の痕跡をとどめているだけである。

(二)

毎年五月二十七日の海軍記念日には、航空隊内を町民

に開放して飛行機の見物などさせるのが恒例の行事であった。或る年の海軍記念日に私達上堅田小学校も航空隊見物に行くことになった。広いだけで埃っぽく、周囲には家もないような幹線道路を行けば、その詰のところには海軍橋がある。橋の袂に人間が一人立って入れるだけのボックスがあり、そこに「佐伯海軍航空隊」と書いたリボン巻いた水兵帽をかぶった水兵さんが番兵として銃を持って立っている。見物客が頭を下げたり敬礼したりすると「休め」の姿勢から足を揃えて「気をつけ」の姿勢に変えて答礼してくれる。そこを通って海軍橋を渡ればもう町内とは雰囲気の違う子供心にも厳しく身の引き締まる思いのするような海軍構内である。私達は庁舎の前を通り、更にもう一つの橋を渡って飛行場に行き、或る格納庫の前に案内された。格納庫の中には何機かの複製機が置かれていた。学童達は飛行機の前に座り搭乗員の説明を聞いた。「おいやん飛行機が上る時にやどいな梶をとるんな」という無様な質問にも、搭乗員はニコニコしながら昇降舵、方向舵補助翼等を動かして親切に説明してくれた。

引率の岩田稔穂先生（故人、下城の人）も生徒のため

にいろいろと搭乗員に説明を求め、落下傘なども見せてもらったが、軍の機密に属するようなことはやんわりとことわられた。岩田先生はそれが稍不満だったのか「もうねえんな、もうちつとう何か見せてくるりやいいのに、のうヨイ」と大きな声で生徒に呼びかけたので、生徒達はよろこんで笑い、搭乗員も困ったような顔をして笑っていた。岩田先生はまことに素朴そのもののお人柄であつた。一方飛行場の方では複葉機が離着陸をくり返していた。蛇崎方向に向けて鈍速の艦爆、艦攻が離陸すると、間をおかずにそれを追いかけるように身軽で俊速の戦闘機が離陸し、私達の目の前で見るも鮮やかに追い越して旋回して行った。今なら大変なニアミスで危険な行動だろうが、これも若い搭乗員の憎めない稚気であつたろうし、それを見る私達も「ああ追い越した、追い越した」と云って手をたたくて喜んだ。空を飛び手を触れることもできない飛行機を目のあたりに見て、それを自由自在に換作する搭乗員から話を聞いたりすることは、全く別の世界を見るような驚きと感動があり、私達学童にとっても海軍記念日は何よりも待ち遠しく胸の躍るような楽しい行事であつた。

(三)

昭和十六年十二月八日に太平洋戦争が始まり、ハワイ真珠湾に続いてマレー沖海戦においても海軍航空部隊は、イギリスの最新鋭主力戦艦プリンス・オブ・ウェルズを撃沈し、戦艦レパルスを轟沈するという偉功を立てた。その翌年の海軍記念日には、佐伯航空隊でも隊内の見物に代つて撃沈を記念した行事が催された。まだ番匠川の改修前であり、料亭「豊海」（現在の豊海菌科のあたり）の裏には番匠川の清流が測のように深く淀み青味を湛えていた。

航空隊で制作され曳航されてきた木造の大きな模型の戦艦はその深みのところに浮かべられた。濃いグレーの艦の舷側には白いペンキで「プリンス・オブウェルズ」と書かれていた。その艦のマストから岸边の方に太い針金を渡し、それに雷撃機の模型を取付けて撃沈の瞬間を演じようというのである。

市民は木で架けられた池船橋の上からその模様を見物することになった。中学生だった私達も、学校が終ると急いで池船橋に行つて待機していた。やがて準備も整い、指揮官の号令により岸边から針金を伝つて雷撃機がプリ

ンス・オブ・ウエルズに向つて進んで行つた。固唾を呑んで見守る私達の目の前で、ゆっくり近づいた雷撃機から航空魚雷が発射され、それが命中したという想定で爆雷（若しくはダイナマイト？）が発発した。大きな水柱が立つて艦はバラバラになつて壊れ、その破片が水上に漂つた。水中で爆発したため、近くにいたチヌ、ボラなどの魚が浮き、海軍の許しを得た地元の人達が争つて船を出してその魚を拾つた。これには、あらかじめ航空隊が市民へのサービスとして魚が一番集まるところへ艦を浮かべ、そこで爆破するという配慮があつたようである。日を追つて激しさを加える太平洋戦争と、厳しい軍の機密保持のために、以後は海軍記念日の行事も行われなくなつてゆき、これが佐伯航空隊における一般市民への最後の記念行事ではなかつたらうか。

(四)

私達が中学校に入り、太平洋戦争が始まつてからは、奉仕作業などの名目で航空隊に行くことも何回があつた。そんな或る年の夏、私達は教師に引率されて級友達と飛行場の整地作業の奉仕に行つた。陽炎の燃え立つ飛行場

からは、九九艦爆が時間をおいて一機ずつ豊後水道の哨戒飛行に飛び立つて行つた。その機影が水の子方面の山蔭に消えるとやがて東の空から爆音が聞こえてきて、任務を交替した機が帰ってくる。大入島上空から着陸コースに入った機は、グンと速度を落とすとすぐに着陸し、後席の搭乗員は座席に立つて操縦員に指示を与えている様子で、ノロノロと地上滑走しながら格納庫の前に帰ってくる。

私達は作業そつちのけで離着陸に見入り、格納庫前のプロペラを止めたばかりの艦爆のところに集まつた。今まで空を飛んでいた艦爆からはエンジンの温もりを発散させていた。

機から降り立つた搭乗員は私達に向つて、「お前らも予科練に来て早く飛行機にのるようになれよ。空を飛ぶのは実に気持ちがいいぞ。操縦席はエンジンの熱で温いから冬はもつてこいだ」とハキハキした軍隊口調で話かけてきた。私達の年代の中学生が、予科練に吾れも吾れもと志願したのにはこうした無作為の宣伝に負う面も多分にあつたようである。

教師の注意で作業に復帰した私達は、飛行場南端の整

地作業を受持った。航空隊側からは、雷撃機操縦長という兵曹長が監督に来ていた。色の黒い目の鋭い、小柄で精悍だがどこかユーモラスな感じのその兵曹長は、上部の針金を抜いて学生帽のような型になった士官帽をかぶり、飛行靴を履いて自分が真つ先になって汗みづくで働いた。ダラダラしていた私達は、その姿にかすかな良心の痛みを感じ申し訳なく恥かしいと思う気持ちがあった。

作業終了時間がくるとその兵曹長は、整列した私達に對し「有難うございました。お元気で」と大きな声で何回もお礼を云い敬礼をくり返した。生意氣盛りの私達は、翌日学校に行くとその兵曹長の話をもち出して、表情や動作、海軍特有の崩れた敬礼の真似などをしてふざけ合った。

(五)

中学校高学年に差しかかっていた私は、空への憧れから滑空班(グライダー部)に入っていた。中学校には二機の初級機(プライマリ)があり、日頃は運動場で訓練を行っていたが広さが十分でなく、思い切った滑空ができないのである。

航空隊からは時々飛行場使用の許可が出るらしく或る日教官の野田先生に引率されて班員はグライダーを分解してリヤカーに積み飛行場に行った。広々とした飛行場には何の障害物もなく思いきり訓練ができるのである。一しきり訓練を終えた私達は、その日はグライダーを格納庫に納めさせてもらい帰る準備をしていた。そこにその日の任務を終えた二人の艦爆搭乗員が帰ってきた。一際背の高いおとなしい感じの一人の搭乗員が、格納庫に置かれているグライダーに乗って操縦桿や踏み棒を動かしてみても「何だかオモチャみたいだなあ」と言った。すぐ近くには、癖の強いあまり上手でない字で「十九日降爆」と白墨で発動機カバーに書かれた整備中の九九艦爆が置かれていた。

私は、迫力に満ちた実物の艦爆と頼りない感じのグライダーとの対比に一種の失望と虚しさを感じ、却って空への憧れをかきたてられた。

グライダーなどよりも実物の飛行機に一日も早く乗りたいと思ったのである。こんな環境に置かれていた私達は、知らず知らずのうちに軍国少年の心を培われていたのである。

佐伯航空隊が開設されてからは、寒い冬の朝も夜の明ける前から轟々たる試運転の爆音が聞こえてきた。その頃の飛行機はスピードの遅い複葉機で、座席の覆いもなく、茶色の飛行帽、飛行服を着けた搭乗員の上半身の半分が地上からも丸見えのような、まことに人間臭いものであった。子供達は着陸コースに入って低空を低速で飛ぶ機上の搭乗員を見ては「ア、人間が動きよる」とか「人間が手を振った」などと云ってよろこんだ。当時の搭乗員にも相当な冒険家がいたらしく、複座乃至三座の鈍速の艦攻、艦爆を駆って宙返りを敢行するパイロットもあつた。城山の上空あたりで何回もくり返して宙返りをするのであるが、スピードが遅いために宙返りの円が小さい。戦闘機にくらべて図体が大きく鈍重な感じのする飛行機が「ブ・ウ・ウ・ン」という宙返り特有のエンジン全開音を響かせてクルリと小さな宙返りをする姿は、地上から見ても稍滑稽な感じがした。複葉機だった艦爆もやがて低翼単葉、固定脚ながら洗練された型の九九艦爆に替り、その座席にもガラスの覆いが着くようになった。カン高い特徴のある爆音を立てながら飛ぶ九九

艦爆はスピードも割合に速く、初冬の朝、たまたま私達の歩いていたすぐ近くの表畠を飛行中の影が走り抜け、その速さに驚いたことがある。胴体前面に固定式の機銃を装置し、宙返りも可能で危急の場合には、或る程度の空戦もできる性能を備えていると聞いた。この艦爆の主任務は急降下爆撃で、主翼の下面に吊架された一発乃至数発の爆弾を艦船や地上の目標に向けて投下するのである。佐伯の空でも時々その降爆訓練するのが見られた。南の空から北上しながら三、四千メートルの高空を相当な間隔を置いて五、六機が縦列に並んで爆撃コースに入り、飛行場の海岸近くに置かれた標的艦に向つて一機ずつ急降下しながら模擬爆弾を投下するのである。その訓練の様相から、操縦偵察のペアを組んだ二人の搭乗員の気質や技量が伺えるのも面白かつた。文字通りの急角度であわや海面に突つ込むのではないかと思うほど低空まで降下する機もあれば、緩やかな角度で降下し千メートル附近で早くも引き起こして上昇に移る機もあつた。低空まで降下するほど命中率がよくなるものでもないのだから、地上から見物している私達には、ギリギリまで接近して投弾する機の方が勇敢で技量も優秀なように思

えた。こうした急降下につぐ急上昇は、搭乗員の体に想像以上の負担がかかり、長く続けていると心臓などに障害をきたすようになるらしい。現在作家で活躍している豊田穰も艦爆の士官操縦員として空母で佐伯湾に入港し、航空隊から佐伯の空に飛び立ったこともあったようである。

(七)

昭和十六年に入っても、子供だった私達には国難の危機感あまりなかったようであるが、海軍では着々と太平洋戦争の準備をしていたのである。確かその年の夏だったと思うが、益過ぎに台風が襲来し、それが去つて間もない頃佐伯湾に空母を含む連合艦隊が入港した。上陸した海軍さんの姿が町に溢れるので艦隊の入港はすぐに知れるのである。

台風が去つた直後の青空を巨大な爪で引つ掻いたような形の雲の残る空を、湾内の空母から飛び立ったと思われる見馴れぬ飛行機が盛んに上空を飛び交つた。胴体後部や主翼下面に幅広いリボンを巻いたり貼り付けたりしたような大きな線の入つた機もあった。恐らく所属母艦や編隊長などを示す標識であろう。九六戦よりも一回り

大きく、翼を傾けて旋回する姿は優美そのもの、完全引込脚で主車輪も尾輪もどこに収納しているのか全くわからず、操縦席の風防も単座機にしては大き過ぎるようである。私達は新型の急降下爆撃機だろうか、それにしても運動が軽快すぎるようだと言ひねりながら見上げていた。やがて上陸した海軍さんの口から出たらしく、それが最新鋭戦闘機「ゼロ戦」であることを知り、今まで見馴れた九六戦とのあまりの違いに驚き、あんな大きな戦闘機で空中戦ができるのだろうかと思つたほどである。これが私達と零戦との初めての出会いであった。それ以降は零戦隊が佐伯航空隊に駐留することも多くなり、佐伯の空ではよく空戦訓練が行われるようになった。航空隊から監視のよく効く城山上空一帯が訓練空域に指定されているのか、そこで教官と練習生といった感じの二機が追いつ追われつる巴戦を展開、お互いに有利な後尾につこうとして宙返りや急旋回をくり返し、練習生が散々苦勞した末にやっと教官の後尾についたと思つたら鮮やかにかわされて目標を見失い、どこに行つたのだろうかと言ひねりながら見回すような感じの場面もあり、見えても技量の差がわかつて練習生に声援を送りたいような気

持ちであった。その訓練が終ると教官は練習生をいたわるように連れて高度を下げ、二機はホツとしたように着陸コースに入る。篠崎公園の土手からそんな光景を見ていた私達の上空を、高度を下げた機が航空隊を指して速度をあまり落さないまま翼を左に大きく傾け機腹を見せて左旋回する姿態の、スピード感あふれる得も云えぬ美しさは今でもハッキリと臉に残っている。爆音を聞いただけで零戦か九九艦爆かなどすぐに機種判別ができるほど飛行機に興味をもっていた私達であるが、零戦が世界に冠たる名機であったことを知ったのは戦後になってからである。こうした思い出つきぬ佐伯の空に名残を惜しみながら昭和十九年九月、私は予科練入隊のため佐伯を離れていった。

(八)

内地に居た私は終戦になるとすぐに復員できた。一年ぶりに見る懐かしい佐伯の空からは飛行機の姿は殆ど消えていたが、それでも時折私達には馴染みのない飛行機が航空隊から飛び立つことがあった。子供たちの話から、それが対潜哨戒機の双発「東海」でありまた機上操作練

習機「白菊」であることを知った。何れも何かに遠慮するように低空を低速で目的もなしに飛んでいるような感じであった。日の丸の標識を塗りつぶして消したそれらの飛行機は、もはや気概と誇りに満ちた海軍機ではなく、ただ空を飛ぶだけの道具にすぎない飛行機であった。やがてそれも飛ばなくなり、佐伯の空からは日本の飛行機は姿を消してしまつたのである。それからしばらく経つた頃、私達の部落にも進駐軍の命令による賦役の割当がきた。航空隊の残務処理とのことで、若い私は村の世話役から出役するよう指名された。早朝、大手前に集合し警察の手配した数台の大型トラックの荷台に作業員達が分乗して航空隊に向かった。

さびれ果てた朝の本町通りを行く私達のトラックを、後から来たアメリカ兵の乗つたジープが驚くようなスピードでS字型に縫うようにして追い越して行つた。私達はその鮮やかなハンドルさばきに驚異の目を見張つた。航空隊での作業は、警察官の立会のもとに残つた爆弾を投棄処分することであつた。頑丈な木箱に入れて格納庫付近に積まれた爆弾を、地面から大型トラックの荷台に架けられた二本の太い角材の上を皆でヨイシヨ、ヨイ

シヨと転がしながら積み込み、所定の個数を積み終ると海岸に待機している船まで運んで豊後水道に投棄するのである。大きさや重さなどからして二百五十キロ爆弾ではなかったらうかと思う。蓋を開けられた一個の木箱の中の爆弾尾部の安定板に、監視に来ていた華奢な感じのアメリカ軍将校が鉛筆でギツシリと何かを書き込んだ。あとで「何を書いたのだろうか」と思つてのぞきこんだ。私の目に「スクラップ」という英語だけが読み取れた。

私は爆弾置場に表示された「飛行長主管兵器」の文字に、往年の栄光の艦爆隊を思い感無きを得なかった。海軍機の飛ばなくなった佐伯の空では、時折クツキリとアメリカの標識をつけたグラマン戦闘機やノースロップ双発夜間戦闘機などがこれ見よがしに超低空まで急降下急上昇を演ずることがあった。私の思い出の中をこれらの片片が懐かしさと悲しみを織りまぜて走馬灯のように駆けめぐり、かつて佐伯航空隊で夢を結び、命を捨てて雄々しく戦った空の防人達は歴史の一ページの中に消えていったのである。

佐伯市下久部岡ノ谷

甲種飛行予科練習生十四期生



パールハーバー戦艦ミズーリ号にて (2000年12月7日)
楡垣七郎・赤松勇二・後藤 豊